
頑張れマイナちゃん 続×5

マドハンド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

頑張れマイナちゃん 続×5

【Nコード】

N3661Y

【作者名】

マドハンド

【あらすじ】

マイナちゃんの奮闘記

「これは由々しき事態です……」

今日もやつぱり日の目を見ない薄暗い部屋で、マイナは鋭い目つきでモニターを睨みつけていた。

激しく揺れ動く感情に合わせて、後頭部の高い位置で括った髪をふるふると震わせる。

「マイナちゃん？ 一体どうしたの？」

背後から中性的な声をかけられると、マイナは言葉を荒らげながらモニターを指差した。

「私の^{競作スレ}テキトリーを荒らす不届き者が現れたのです！」

「テキトリーじゃなくてテリトリーだよね」

背後の声がマイナの間違いを指摘すると、マイナは素直に頷く。どうやら今は、変な意地を張る余裕もないようだった。

「ソレです。競作スレの支配者は、天才大作家であるこの私のはずなのです。それが今、キョウサクとかいう冴えない凡才に侵略されているのです！」

「そ、そうなんだ？」

背後の人物が何故か動揺していることに気がついた様子もなく、マイナは競作スレに現れた謎の新入りに対して不敵な笑みを浮かべた。

「ふふふ……私のテリトリンを犯すとは……いい度胸ですね」

「テリトリーね」

「ソレです」

そこでやっとマイナは、背後にいる者がいつものナロウではないことに気がつく。

ショートカットの髪型と中性的な顔立ちをした、小柄な体格の人物だ。その身に何故か学ランを羽織ってはいるが、その姿からは性別の判断がつかない。

その初めて見る人物に、マイナは首を傾げた。

「……ところで貴方、誰でしたっけ？」

「えっと、初めまして。僕、キョウサクと言います」

どこかオドオドとした自己紹介を聞くと、マイナはVの字にした眉毛を興奮に震わせて立ち上がる。

そのただならぬ様子に、キョウサクが身を強張らせた。

マイナは自身の小さな右手で拳を作り、それを勢いよく打ち出す。

キョウサクが、その天に突き出された拳を呆然と眺めると、マイナが熱の込もった声を上げた。

「そうですか。では、キョウちゃん！　一緒にこのテキトンとかいう奴を退治するのですっ！」

「キョ、キョウちゃん？」

「キョウサクのキョウを取ってキョウちゃんです。　同士にはまず信頼関係が必要だと思つのです」

「そ、そうなんだ……でも、どうするの？」

どうやらマイナは、興奮のあまり名前が倒錯してしまっているようだ。

キョウサクがとりあえず話を合わせると、マイナが得意気な顔でその計画を打ち明けた。

「まず私が短編を書きます」

「うん」

「そして、次はキョウちゃんが私の作品をお気に入り登録します」

「うん……うん？」

「評価ポイントも5：5でお願いします！　そして私を称賛する感想を書くのです！」

「ちょ、ちよつと？　マイナちゃん？」

何だか間違った方向に走り始めているマイナに、キョウサクは疑問の声を上げる。

だが興奮しているマイナは、それに構わず言葉を続けた。

「そして、次はさらにレビューを書くのです！　これで完璧です！　ふふふ……ついでに、ランカにも一泡吹かせるです」

「あの〜」

「称賛の感想とレビューによって、競作スレの愚才どもは私こそが本物の天才だと気がつくでしょう！　テキストとかいう適当な名前の奴のことなぞ、すぐに忘れるはずです！」

「えー」

「では、よろしく願いしますね。キョウちゃん！」

マイナが満面の笑顔を浮かべて、キョウサクにハイタッチを要求する。

キョウサクはマイナから送られる親愛に負けて、思わず手を合わせてしまうのだった。

後日、とある者の密告によりマイナの企みを知ったナロウは、いつもの薄暗い部屋にて、マイナの後ろに陣取っていた。

モニターにある感想を読んだマイナが、凍りついたように動きを止める。

くまず誤字脱字が多いのが気になりました。作者さんは本当に日本人なのでしょうか？ 非常に読みにくいです。

次に、所々に作者さんの願望が見え隠れしていて、はつきり言つてキモいですね。あまりのキモさに鳥肌が立ちました。読んでいて不快になる作品はこれが初めてです。

あと、作者さんは何か胸にコンプレックスをお持ちですか？（ちなみに私は巨乳ですw）

こんな場所で現実逃避するのではなく、ちゃんと現実と向き合つて下さい。

最後に、話の構成が滅茶苦茶ですよ。矛盾点を指摘する気すら失せるほど酷いです。この短編を書いた作者様は小学生なのでしょう

か？　まずは国語の勉強をすることをお勧め致します。　学校に行
って作文の書き方を先生に教わりましょうね　>
「……」

マイナが力尽きたように真っ白になっていると、ナロウが慰める
ように肩に手を置いた。

「マイナちゃん、しつかり。ほら、感想をくれた人にお礼の返信を
するんだ」

「鬼ですか！？　鞭は私の業界ではご褒美じゃないですよ！」

マイナが弾かれたように抗議の声を上げると、マウスを操作して、
削除ボタンをクリックしようとする。

だがナロウは、すかさずそれを阻止した。

「あつ！　こら、マイナちゃん！　せつかく書いてもらった感想を
消しちゃ駄目だよ！」

「後生です！　消させて下さい！　消させて下さいいいい」

マイナが涙を流しながらナロウと小競り合いをしている内に、今
度はレビューが投稿される。

とりあえずマイナは感想の削除を中止して、そのレビューを読ん
でみた。

<この話は絶対に読まないほうがいいです！　幼稚園児以下の文章
で貧乳作者の気持ち悪い妄想が垂れ流されています。　このレビュ
ーを見た方は、サイト内で親しい人達にも注意を喚起して下さい>

「これはもう荒らしじゃないのですか！？」

「ほら、マイナちゃん。レビューをくれた人にお礼のメッセージを

「――」
「もうそれはいいですから！」

悲鳴を上げるマイナに、だがナロウは心を鬼にして語気を強めた。

「マイナちゃん、お礼を書きなさい。それと謝罪も」
「はい……」

ナロウの声に静かな怒りを感じ取って、マイナが小さくなる。
しぶしぶマイナは、その感想とレビューを書いた人物に、「ありがとう」と「ごめんなさい」を一言ずつ送るのだった。

そのメッセージは、感想とレビュー書いた者ではなく、別の人
物に届いたのをマイナは知らない。

（後書き）

だが男だ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3661y/>

頑張れマイナちゃん 続×5

2011年11月15日02時04分発行